

シノドスへの歩み 東京教区のこれまでの歩みを振り返る

その四 新しい一歩へ

小西広志

2022年5月2日

はじめに

皆さん、こんにちは。東京教区シノドス担当者の小西広志神父です。

2000年代の東京教区はどのような歩みをしたのでしょうか。わずか20年ほど前のことですが、世界ではいろいろなことが起こりました。2001年9月11日ではアメリカで同時多発テロ事件がありました。崩れゆく摩天楼を目の当たりにしながら、新しく始まった21世紀が決して安泰で平和なものでないことを誰もが悟ったと思います。事実、世界各地でテロ事件が頻発し、2003年にはイラク戦争が勃発しました。日本も平和貢献の名のもと自衛隊を派遣しました。国内では高齢化社会が加速しました。政治の変革の中で人々の暮らしの中に経済格差が生まれたのもこの頃です。社会は大きく変わり、価値観も変わっていく中で東日本大震災などの大規模災害に直面したのです。このような激動の時間の中で、わたしたちの東京教区はどのように歩んできたのでしょうか。

新しい牧者：岡田大司教

大聖年

2000年は「大聖年」でした。キリストの降誕2000年を全教会で祝いました。その際にヨハネ・パウロ二世教皇は貧しい人々への配慮、債務国の債務取り消しなどを国際社会に呼びかけました。もはや東西対立の国際社会は終わり、豊かな国とそうでない国との間に経済の差、生活の差が生じる時代となりました。そして、グローバル化が加速し、豊かな国の人々が生活を享受するために、そうでない国の人々が一生懸命に働かなければならない世界となったのです。

大聖年には教区内では巡礼指定教会への小さな巡礼の旅が盛んに行われました。東京教区は祈りの中で新しい世紀を迎える準備をしていったのです。

集会司式者・聖体奉仕者養成講座

そういった時代の中で、司祭と信徒が協力しあって信仰の共同体を守り、育んでいくという新しい取り組みがなされていきました。すでに90年代後半から司祭不在の際の集会司式者、ならびに臨時の聖体奉仕者の養成講座が開催されました。そして大司教さまの認可のもとで多くの方々が小教区共同体で奉仕の務めにつきました。

白柳枢機卿、森補佐司教の引退

2000年6月12日に教皇庁は白柳誠一枢機卿の東京教区長の辞任、ならびに森一弘補佐司教の辞任を発表しました。そして、浦和教区（現さいたま教区）の岡田武夫司教が第8代の東京教区大司教に任命されました。9月3日に岡田大司教は着座しました。

岡田大司教は東京教区出身の司教さまで、かつては日本宣教研究所の所長をなされ、また雑誌「福音宣教」の編集長もなされた方でした。浦和教区（現さいたま教区）教区長の時代は、外国籍の方々と共に歩む教会づくりを推進なさいました。

「新しい一歩」

新しい教区長である岡田大司教さまを迎え、東京教区は新しい一歩を踏みだしたのです。

新しい千年期の教会づくりに向けて

すでに1990年代の終わり頃から、小教区共同体のあり方が模索され始めました。司祭の高齢化と召命の減少は顕著になってきました。一人の司祭が一つの小教区共同体を司牧し、宣教するのは近い将来難しくなるだろうと予想されました。また、外国籍の信徒の方々の司牧、青少年への宣教と司牧、さらには社会の中で弱い立場に追いやられた方々へのかかわりなど、司祭に課せられた務めは年を追うごとに大きくなっていきました。信徒と共に協力しあって、新しい世紀を迎えた日本の社会の中で教会は生きていくことが求められたのです。そこで、小教区間の協力をより行うために、従来の7つのブロックから成り立つ東京教区のあり方とは異なる、新たな体制が求められていきました。そういった動きの中で小教区の統廃合なども案として浮上しました。「新しい千年期の教会づくりに向けて」という教区全体を対象としたアンケートが実施され、多くの方々の意見が寄せられました。

メッセージ：「新しい一歩」

岡田大司教さまは、メッセージ「新しい一歩」を2001年6月に発表しました。「21世紀の福音宣教へ向けての小教区再編成」と副題がつけられたこのメッセージでは現状を分析し、東京教区が直面している問題と課題を明らかにしています。それによれば既存の小教区制度には限界があり、「小教区の壁を越えた教会どうしの交流と協力を進め」なければならないと教区の課題をまとめています。この主張には岡田大司教さまが抱えている教会のイメージが背景にあったと思います。メッセージには

教会とは、罪のゆるしを信じ、神への信頼と希望のうちに、自分の弱さを自覚しながら、受け入れあい、恵みをともにしながら、祈りと感謝と賛美をささげつつ、貧しい人として貧しい人とともに歩む寄留の民ではないでしょうか。その中心にはいつも復活されたキリストがおられます。

とあります。

第二バチカン公会議が示した地上を「旅する教会」、そして、1970年代以降東京教区が取り組んできた司祭、修道者、信徒が「共に歩む教会」、さらには「第1回福音宣教推進会議」(NICE-1)が目指した「開かれた教会」といった教会の未来の姿を岡田大司教さまは東京教区内で実現しようとなさったのだと思います。

メッセージ「新しい一歩」は小教区の再編成と宣教司牧の強化を目指しています。

宣教協力体

メッセージ「新しい一歩」を受けて様々な取り組みがなされていきました。小教区共同体の使命について連続研修会も開催されました(2001年6-7月)。教区集会もたびたび開催されました。その中で強調されたのは新しい地域協力体の創設でした。地域協力体とは何か、どうあるべきかについて各小教区共同体で話しあわれ、九つの地域協力体から「新しい一歩」への提言が提出されました(同12月15日)。しかし、当時の教区ニュースには、岡田大司教さまが描いておられた教区の未来像と各小教区共同体が実際に考えている将来の姿とに乖離があり、大司教さま自身が戸惑っておられる様子が見てとれます。

しかし、メッセージ「新しい一歩」は、東京教区の皆さんが現状に目覚め、教会に対する将来の夢を語り合い、分かち合うきっかけとなったと思います。

翌年、2002年12月11日に岡田大司教さまはこれまでの小教区の再編成の議論をまとめる形で、2003年4月より宣教協力体を新たに発足させました。これは「小教区再編成の第一段階として」なされたもので、「教区としての福音的使命を生きる態勢作り」目指すものでした。これにより東京教区は22の宣教協力体に編成されたのです。

その後、2004年11月には幸田和生師が東京教区の補佐司教として任命され、翌2005年2月19日に司教に叙階されています。

22の宣教協力体による東京教区の態勢は、宣教協力体でのいろいろな試行錯誤を繰り返しながら、現在に至っています。

大規模災害の経験

2011年3月11日に東北地方の太平洋沿岸一帯中心に地震が発生し、津波もおこりました。東日本大震災です。そして、津波を引き金に東京電力福島第一原発での原子力事故も生じました。被害は東京教区内の千葉県にもおよびました。このような体験したことのない災害にあって、日本の教会はいち早く対応しました。聖職者も、修道者も、信徒もころを一つにして祈りましたし、復興のお手伝いのために被災地へと向かいました。

た。震災から一か月後、東京教区ではカトリック東京ボランティアセンター（CTVC）を開設しました。支援活動を継続的に行うために被災地ボランティアの募集、派遣、物資支援を組織的にこなったのです。これは1995年の阪神・淡路大震災の経験が生かされたと思います。カトリック教会は仮設住宅に住む方々に最後まで寄り添ったのです。

それぞれボランティアは各小教区共同体を中心に組織され、それ以外に東京教区内のカトリック施設、学校などからもボランティアは派遣されました。また、教区内のあちこちの聖堂で祈りがささげられました。地道な活動の結果、被災地の方々からカトリック教会は受け入れられてもらいました。多くの若者たちがボランティア活動をしたことで、彼らの信仰と生き方に大きな変革をもたらしたと思います。

2019年教皇フランシスコが来日した際、東日本大震災の被災者との集いを開催できたことは大きな恵みでした。

東京教区内では今後、大規模災害が教区内で発生したことを想定して、対策を講じています。多くの小教区共同体は地域の人々との連携を深めながら、大規模災害への準備を進めています。

おわりに

2017年10月、岡田大司教さまの辞任が教皇庁から発表されました。後任として新潟教区長の菊地功司教が第9代の東京教区大司教に任命されました。同年12月に着座しました。新しい牧者を迎え、東京教区はさらに一歩を進めています。2020年には新型コロナウイルス感染症蔓延のなか東京教区「宣教司牧方針」を発表し、三つの柱「宣教する共同体」、「交わりの共同体」、「すべてのいのちを大切に作る共同体」を据えました。この「宣教司牧方針」は半世紀前の教区大会で浮かび上がってきた課題、そして「第1回福音宣教推進会議」NICE-1での教会の目指すべき方向、さらにはメッセージ「新しい一歩」で示された東京教区の未来の姿といった先人たちの議論、夢、努力、働きの上に成り立ったものです。

シノドス的な教会とは「共に歩む」教会、「交わり」の教会です。わたしたち東京教区はすでにシノドス的な教会を始めています。しかし、まだ完成には至っていません。教会のお母さまであるマリアさまの祈りに支えられながら、父と子と聖霊の三位の神の働きと恵みの中で東京教区は今も、そしてこれからも歩んでいくのです。